

暗黒の欠片
vol. 8

怪

奇怪伯爵

マンションから駅まで最短ルートで徒歩10分を要する。

他の道を通れば、5分は余計に費やしてしまう。

それでも、雨の降る日は、そのルートを避けるようにしていた。道が細く危険であるし、もうひとつ絶対的な理由があった。

初めにそれを見かけたのは、数ヶ月前のことだった。

降りしきる雨の中、どことなく不穏な空気を放つ少年が、交差点に佇んでいた。

真新しい青色の雨合羽だけが妙に存在感を残し、正直なところどのような表情だったかは覚えていない。

なんとなく嫌な気がして、私は遠目に少年を観察するだけに止めた。

自分の息子と同じ年齢であろうか。少年は身動きもせず、視線を移動させることすらしない。

その不自然さに、私は少年がこの世のものでないことを悟った。

自宅に帰り調べてみると、少し前にその交差点で死亡事故が起きていたことがわかった。

以来、私は遠回りのルートを選んでしたが、急用でやむなく通らざるを得ない日があった。

少年を見た時から時間も経っていたので、もう大丈夫ではないかという些かの慢心もあったのだ。はたして、そこに少年の姿はなかった。

私は安堵し、思わず少年の身に起きた不幸に同情の念を送って、交差点を通り過ぎた。

その夜。

一旦寝ついたものの、真夜中にはたと目が醒めてしまった。外の激しい雨音が原因かも知れなかった。

冷蔵庫の飲料で喉を潤し一息つくと、妙に玄関が気になった。

鍵の状態を不安に思い、確かめるためにドアに近づく。

のぞき穴から外を確認すると、私の全身は総毛立だった。

ドアの外に、青い塊が見える。それが、少年の着ていた合羽だと、すぐに気づいた。

私は後悔の念に駆られ、自分の軽はずみな行動を省みた。

幼くして亡くなった少年が孤独を感じていたのは想像に難くない。

少年は、私の同情心を察知し、後を尾けてきたのではないか。もしかすると、自分の親と勘違いしているのではないか。

為すすべもなく、私は夜を明かした。

家人が目覚ます前に、もう一度玄関の外を確認する。

幸いなことに、少年の姿は消えていた。

しかし、外はまだ雨が降っている。このまま止まねば、再び少年が現れるかもしれない。

そして、心配なのは家族への影響だった。

思案にふける私の前に、青い塊が現れた。

呆然とした私に、息子が自慢げに言う。

『パパ、これ昨日ママに買ってもらったの』
私の心配をよそに、母子は無邪気に笑った。

あの少年が息子の存在を察知したら……。

暗黒の欠片 vol.8 怪

<http://p.booklog.jp/book/49929>

著者：奇怪伯爵

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kkaiki0710/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/49929>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/49929>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.